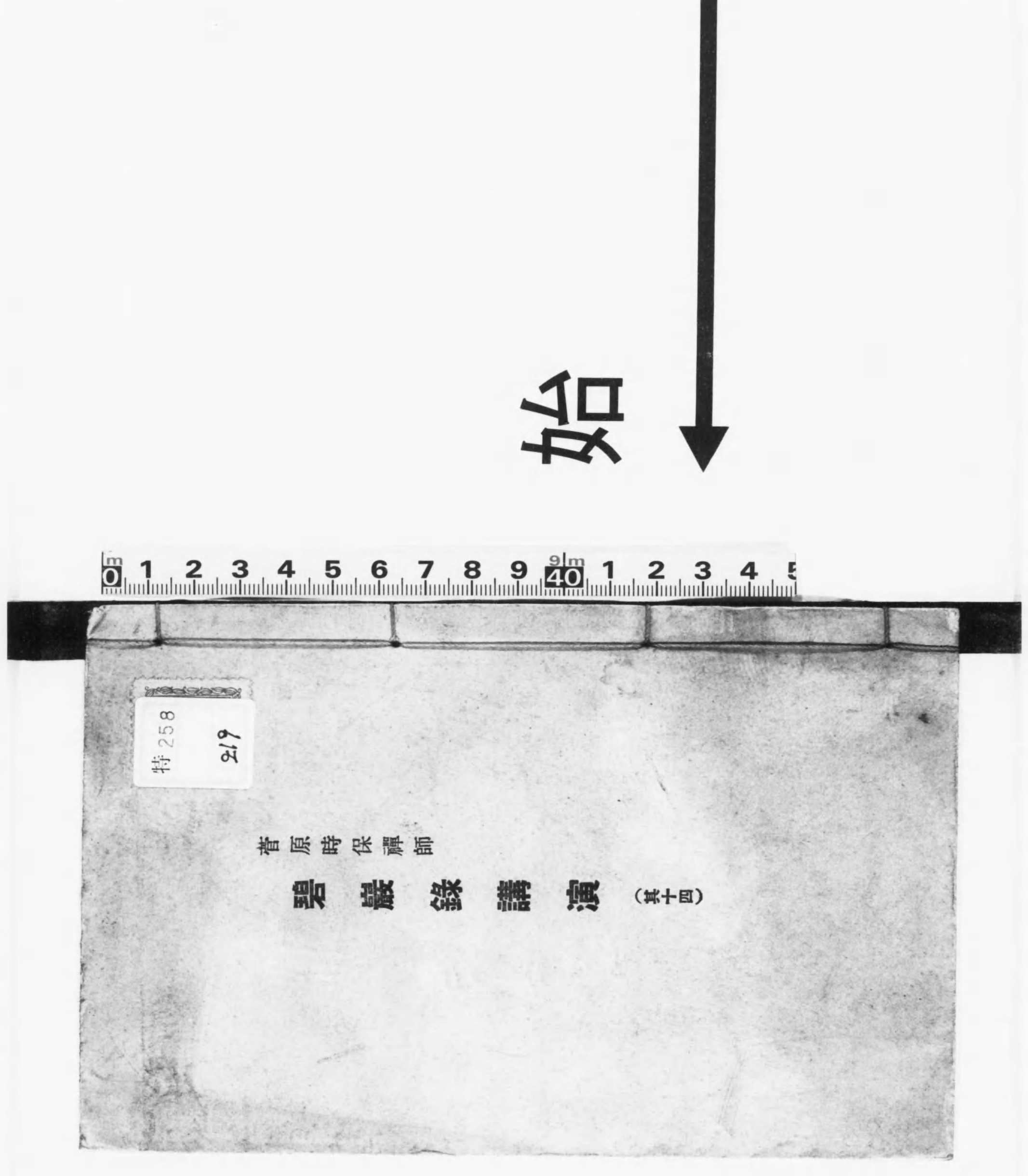

特258
219

菅原時保禪師

碧巖錄講演（其十四）

特 258
219.

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其十四）

帝國圖書館藏

碧巖錄提講

第三十則　趙州大蘿蔔頭

『植ゑて見よ花の育たぬ里は無し、心からこそ身は卑しけれ、』と云ふ歌がありますが、いかにも〳〵であります。たとへ土地に肥瘠あり場處に好惡ありと雖も、種子を下し苗木を植ゑて見なければ、果して好結果を得る乎又は不結果に終る乎は、逆知することは出來ません。然れば種子を下すと苗木を植ゑることが先決問題であります。（修行の種子、苗木は、信念、信仰、信力、信行、それである。）現に東洋の花木を西洋に移

植し、その花木が意外に繁茂し、西洋の草花を東洋に轉植し、その草花が殊更に馥郁たるを見ても、植ゑて見よ花の育たぬ里は無し、と云ふことが事實に證明されます。修行もそれと同一筆法で、信念、信仰、信力、信行の種子を下し、苗木を植ゑつけるが先決問題。經に、「初發心辨成正覺」とあります。

――されど或人の歌に、土地氣候かはる國柄わきまへず、西洋植木植ゑからす人、』と云ふのもあります。是に依れば、風土氣候そのもの、決して蔑視することは出來ません。論より事實、其の土地々々で他處にて出來得ざる特産物があります。例せば、(内地)紀州蜜柑、尾張大根、(支那)南地の竹、北地の木の如きがそれであります。果して然らば、種子を下せば苗木を植ゑれば、それで何れの土地でも同一の好結果を得る、と思ふは蓋し一を知つて二を知らざる愚劣者であります。故に修行者も如何なる所で修行しても敢へて妨なしとは云ふものゝ、明師良友を撰びて修行する、それが修行の正道であります。左に擧揚致します本則につき其の様子を熟考なされ。

◎本則

擧、僧問『趙州、承聞和尚親見南泉、是否、州云、鎭州出大蘿蔔頭』

擧す。僧、趙州に問ふ、「和尚親しく南泉に見えたりと承聞す。是なりや否や。」州云く、「鎭州には大蘿蔔頭を出す。」

「南泉」趙州從諗禪師の師匠、南泉普願禪師のこと。――「鎭州」河北の一地方にして趙州の北方に當ると云ふ。大根の名所。日本の尾張も大根の名所。――「蘿蔔」大根のこと。又はカブラとも云ふ。――

大意は、玆に奇拔な一僧が趙州和尚に向つて、「人の噂によりますると、和尚さんは南泉和尚に親しく相見なさつたと云ふことでありますが、實際のことでありますか。」と尋ねると、趙州和尚の返答に、「鎭州には中々大きな大根が出來る。」と。まるで木に竹と云はうか、西を問うたら西を答へずして東を答へた樣なものである。諸君、趙州禪師の心底がおわかりか。――眞箇の提唱は是で終了。』――されど衲の如き凡僧は、更に婆言を弄しなければ聽講者に對して失敬の樣な氣が致します。故に宗旨の本意には多少違反すると知りつゝ駄辯を下します。それが、凡僧の凡僧たる所以である、と笑ひながらお聽きください。

――

趙州從諗禪師は南泉普願禪師の傳法者であることは天下誰人も知らぬものはない。(尤も禪宗以外のお人は無論御存知なから

う。）南泉普願禪師は猫兒を斬却なされた大家。趙州從諗禪師は無の一字を唱へ出された大先生。所謂、此の師にして此の弟子あり、此の弟子にして此の師あり、と云ふべき一對の好師弟である。故に南泉禪師の衣鉢は趙州從諗禪師が受持して居られることは無論であります。（衣鉢の授受底は兩禪師の傳記につき親しく識得なさるべし。）問僧はそれを知りつゝ問うたとすれば、十八問中の檢主問で實に恐るべき毒箭である。――若し眞箇知らずして問うたとすれば、盲蛇ものを恐れず、と云ふ大馬鹿者である。――無眼子の僧と見ては、或は見るその人が無眼子かも知れぬ。故に衲は、南泉と趙州の間柄を知りつゝ故意に問

端を起したものとして提講を進めます。――問僧の心では、趙州禪師若し見ゆと云はゞ、不是と云うて三十棒、若し見えずと云はゞ、不是と云うて大喝一聲、何れにせよ趙州禪師をして一泡吹かしてやらう、と云ふ心がまへで飛込みました。』諸君既に御承知の如く、趙州禪師は六十歲にして發心、修行すること二十年、八十歲の時、趙州城の東にあたる觀音院に住し、大法を擧揚、爲人度生なさること四十年、百二十歲で示寂なされました、云はゞ空前絕後の瞎老漢。――煮ても燒いても酢でも蒟蒻でも喰へぬ、敵一倍の力量を具する大宗匠でありますから、如何なる人が向つて來ようとも貧乏搖ぎもするものではありま

せん。所謂、明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打、隨處隨時、毛頭も意志を用ひず、鏡裏に妍醜を分ち、劍下に殺活を辨ず、と云ふ老作家。如何なる難問に遭遇しても、未だ曾て棒喝を借らず、未だ曾て拄杖を弄せず、未だ曾て拂子を用ひず、唇皮を以て七縱八横、自由自在に接物利生さるゝ其のお手の内は、無物堪比倫、敎我如何說、である。――諸君、刮目して見るべし、趙州禪師が問僧に答へられた、天を撐へ地を拄ふ底の一大活句を。

――州曰く、「鎭州に大蘿蔔頭を出す。」と。腦後に腮を見れば共に往來すること勿れ、とあるが、趙州禪師の人相は、艱難を共にすべきも安樂を俱にすべきに非ず、と云ふ非凡の骨相を所

有してをらるゝから、油斷はならぬと豫て承知はして居たものゝ、まさかと思ふうちにシテヤラレた。いかな拔群の問僧も、鎭州は大根の名所と云ふ受け流しに逢うては呆然たらざるを得ず。否、問僧のみではない。釋迦でも達磨でも燈籠露柱でも流石の衲でも手も足も出ません。飯田師は、鎭州に大蘿蔔頭を出す、と云ふに語を下して、「擬議思量せば三十棒、親見と云ふも遲八刻にして三十棒を受くる責任がある。」と。――畢竟如何。故宗演師は、彼のカーライルと云ふ文豪が「今隻手を擧げて熱と光とを放散する太陽を掴むと云はゞ、世人必ず驚愕の眼を注いで視るであらうが、紙上にペンを走らせてスラ〳〵書

くことに驚く者は無い。然し實際に於ては、此の紙上に書き現はされた文字上に大なる神秘があるのであるが、世人は之れに氣付かない。」と云うて居るのを引いて、蘿蔔頭の片影を形容されたが、如何にも斬新で近代の書生さん方には向くかも知れぬ。

――されど蘿蔔頭は蘿蔔頭のまゝが趙州禪師の答意にして寧ろ蘿蔔頭が生々として居る。カーライルの意思を以て蘿蔔頭を解釋するのは、いはゞ蘿蔔頭は、オロシにもなる、澤庵にもなる、又は千六本として汁の種にもなる、と云ふが如きで、穿鑿少々其の度を失したる感なきに非ず、と衲は愚察を下さゞるを得ず。(有識者の一考を望む。)やはり趙州禪師の大蘿蔔頭をそのまゝ我がものにするなり、我れが大蘿蔔頭そのものになるなり、するが悟りであり禪であり佛法である。又實際の生活と能く融合する。恁麽の道理を知らずして、教相的の説明、哲學的の解釋を下すは、趙州禪師を殺すのみならず、三世の諸佛を殺し森羅萬象を殺し、合せて自己を殺すことになる。苟も禪を修する人は深く注意を拂ふべし。左に何人も擧揚する類例を拈出して見ませう。

僧あり。出で來つて九峰禪師に問ふ、「承り聞く、禪師親しく延壽に見え來る、と。是なりや否や。」(問の形式は趙州禪師に問うたと同一である。)峰云く、「山前麥熟すや未だしや。」意味

は、向かうの畑の麥が實つたかどうか、と云ふことで、別に深意も策略もありません。その別に深意も策略もなき處が容易に手に入らぬ。是を手に入れるが爲に更に參ずること三十年するのである。或日、一僧あり。問ふ、「九峰山下還つて佛法ありや無きや。」峰云く、「有り。」僧問ふ、「如何なるか是れ九峰山下の佛法。」峰云く、「石頭大底は大、小底は小。」大きな石は大きいまゝゴロ〳〵、小さな石は小さいまゝゴロ〳〵、是れが九峰山下の佛法にして天下無類の眞佛法である。――俳人盧元坊が自分の生れ故郷の松任へ來たことを聞いた千代女は、早速その宿を訪ね、門人にして貰ひたいと賴みました。盧元坊はまづ杜鵑

といふ題を出して千代に句を作らせてみました。千代は若葉に匂ふ五月闇の庭を見つめながら一生懸命になりましたが、よむ句もよむ句も盧元坊の氣に入りませんでした。身も痩せるやうな氣持で苦吟してゐるうちに、短い夏の夜はもう白み始めて來ました。千代は思はず嘆息するやうに、「ほとゝぎす杜鵑とて明けにけり」と書きました。この眞情のこもつた寫實の句と千代女の不屈不撓の熱心とに、盧元坊は喜んで千代女を弟子にしました。――又、俳道の祖と仰がるゝ芭蕉翁は、佛頂禪師の「如何なるか是れ閑庭草木裏の佛法。」と云ふ問に答へて云く、「葉々大底は大、小底は小。」と。「青苔未だ生ぜず春雨未だ來らざる

時如何。」と云ふ問に答へて云く、「蛙飛込む水の音。」と。古池や、を敢へてつける必用はない。——

以上強ひて拈出したものゝ、當不當、是不是は、諸君の禪定力に照して取捨せらるべし。眞箇鎭州の蘿蔔頭を口頭や筆端で妙處を顯現することは到底衲には出來ません。過つて邪解に墮せざることが何より肝心である。——衲が言葉に過つて邪解に墮せざることが何より肝心である、と云ふそれと、趙州禪師の鎭州の大蘿蔔頭と、是れ同か是れ別か。——諸君、序に辨別して見たまへ。云ふ勿れ、それが邪解にして且つ邪問、と。

——

◎頌

鎭州出大蘿蔔、天下衲僧取則、只知自古自今、爭辨鵠白烏黑、賊賊、衲僧鼻孔曾拈得、』

讀方

鎭州に大蘿蔔を出す、天下の衲僧則を取る。只知る自古自今爭でか辨ぜん鵠は白く烏は黑きことを。賊々、衲僧の鼻孔を曾て拈得せり。』

「取則」答話のお手本、返事の典型。——「只知」能くわかつてゐる。外のことは兎も角も是れば、かりはわかりきつて居る。——「自古自今」過去は勿論、現在及び未來も。——「鵠白烏

黒」云ひ換へれば、柳は緑、花は紅。』更に云へば、鴨居は横に柱は縦に。――「賊々」趙州禪師を指す。禪師の如きは賊中の大賊。是を抑下の卓上格と云ふ。――「曾」とうの昔に、未だ擧せざる以前に、と云ふことがある。蓋しそれである。

改めて重説致します。故大内君は、「雪竇禪師は、大蘿蔔を出す、と趙州禪師の答話をソックリ拈じ來つたが、趙州と南泉の間のみではなく、迦葉と釋迦の間でも、二祖と達磨の間でも、彌陀如來と世自在王佛の間でも、金剛薩埵と毘盧遮那如來の間でも、時雨と紅葉の間でも、春風と落花の間でも、見えたのか見えないのか、嗣いだのか嗣がぬのか、と云ふ論量のものではない。只此

の鎭州に大蘿蔔を出す、これが即ち正法眼藏蜜附相承傳燈瀉瓶の姿である。」と例の文字禪兼老婆談を弄しながら禪の安賣をして御座る。切に忌む動著することを。由來天機は漏すべからず。(學者のためにならぬ。) 安ものを賣るがよくない。又安物を買ふもよくない。安物を買ふと鼻がおちる。――果然、安物を天下の衲僧が買込んだ。鎭州出大蘿蔔頭、之是の答話こそ答話の典型、と邪解し有難がつて居る。――大根がその樣に有難いか。多くは大根の味を知つて趙州禪師の居り場處を知るまい。大蘿蔔頭、――趙州來也だ。此の外に何ものがあるか。大根の尻尾が笑ひ出すぞ。』――答話の典型で思出した。是非

を說く人はこれ是非の人なり、と罵倒さるゝを知りつゝ、玆に罵倒の種を蒔いて見ませう。

蜀の將軍諸葛孔明、手兵三十萬を率ゐ、渭水の南五丈原に、魏の將軍仲達の七十萬の兵と對陣してゐたが、悲しい事に孔明の身體は未だ敵將と雌雄を決せざるに病魔の襲ふところとなり、日一日と病が進む。時に孔明嘆じて曰く、「我れ死なば、折角今一息と云ふところ迄壓迫してゐた敵の魏軍が忽ちにその勢ひを盛返して、勝利に傲る我が軍を一擊に打破るのは火を見るより明らかである。それを思ふと、諦らめようにも諦らめ切れぬ。――――いや、戰運われに幸せずして敗けるはまだそ

れ程に悲しからず。眞に悲しい事は、先帝劉備の並々ならぬ厚恩に酬ゐる事なくして此の世を去ることである。――――鄧城縣に住む一介の書生でありし其の時、先帝陛下は三度までわが貧しい草庵に行幸し給はつて、特に今の如く身に餘る蜀の宰相に迄拔擢し給うた、其の厚恩に對しても、又御崩御に際して皇太子劉禪に、孔明を見ること朕を見るが如くせよ、』とまで遺命なされた有難い知己の御諚に對しても、何一つ報ずることなく、黃泉に先帝と見えなければならないのが、此の孔明に取つては身を切られるより辛いのである。」と、男泣きに泣いて悶々と悶えられた。是は臣たる人の好典型である。臣たる人、可習、

可學。是が蘿蔔頭に何の關係がある。宿題として諸君にお渡しまうす。――

二祖慧可大師、未だ達磨の法を嗣がざる以前、達磨坐禪の室前に立ち、血を絞るやうな聲で、「聖樣、私は一生懸命でございます。何の命を惜しみませう。三日三夜、雪に立つてゐることが命の惜しいものに出來ませうか。もう凍えて死ぬばかりでございます。どうぞお弟子にして下さりませ。」(聊か男士らしくない樣に思はれます。支那のお人であるから或は然らん。日本人であるならば恁麽の婦女子に似たる泣事は噯氣にも出しません。)面壁の達磨は見向きもせず獨語して云く、「諸佛無上の妙道、曠劫に精進し、行じ難きを行じ、忍び難きを忍ぶ。小德小智、輕心慢心を以て如何ぞ眞乘を得ん。」と。點滴も施さゞる處が眞箇正師家の弟子に對する好模範である。苟も人の師たる者は深く心に銘じ實行を誤る勿れ。――蘿蔔頭と是又如何。

第三軍の司令官乃木大將、我家から三つの棺を出すことを夫人へ云殘して、父子の身も心も君國に捧げ、我が子が安全の位置に移されることを微塵も望んでをられなかつた。勝典中尉は既に南山で戰死、殘つた保典少尉、云はゞ乃木家の一粒種、それが二〇三高地で戰死した。其の通告を持し來つて、「閣下。」――參謀は云ひつかへた。面暗く聲が沈んだ。(その筈、乃木

大將の胸中を察すれば。)此の時暗いランプの光の下で蟲眼鏡で地圖を見入つてをられた將軍は髯の短い顏を向けられた。「乃木少尉が先刻戰死されました。友安旅團長から閣下へ申上げて下さいとの事です。」參謀は少し語調が震へた。「ウンさうか。」只一語、將軍は輕く云うて、その澄んだ眸にも引きしまつた顏にも微塵も狂ひがありません。それぎり、何とも云はれません。

參謀は次の言葉が出ません。將軍の此の刹那の心中、――我子どころではない。我子と等しき忠實な部下が數知れず死傷して居る今である。それすら考の外に置いて居る今である。心血を軍職の上にそゝがれ、要塞攻擊の阿修羅王となつて居る今である。無理はないと思つて、參謀は其のまゝ辷るやうに將軍の部屋を出ました。――すゝんで我子を死地につかしめようとした將軍、乘り心地よい鞍の要求があつても之れを刎付けてかへりみなかつた將軍、(曾て父に、官給の鞍は乘り心地が惡いから父の用ひて御座らぬ鞍を、と主計を以てねだつたことがある。其の時、將軍嚴然として云く、鞍の贅澤を云ふ身分であるまい、それは規定に反した我がまゝ、相ならん、と。)これは將軍司令官としてゞある。親の子に對する情愛としてゞはない。將軍とても、たつた一人の保典少尉が今戰死したと聞いたら、――銅鐵のやうな眼にも一掬の涙を浮かべさうなものだ

が、と参謀はさう思返して見た。この時、將軍の部屋が急に暗くなつた。――おや何うしたのであらう。不審に思うて參謀がのぞくと、地圖を見てをられた將軍はランプの心を捻つたのであつた。――暗くてハツキリは分らぬが、そこには片手で額を抑へ乍ら下うつむいて居らるゝ將軍の姿がボーツと浮出した。――重苦しい沈默が五分間もつゞくと、將軍は又ランプの心を捻られた。部屋は急にパツと明るくなりました。將軍は元のやうな謹嚴な端正な態度で相かはらず地圖を見つめてをられ、何事も起らなかつたやうに冷然として、眼には一滴の涙すら宿つてをらなかつた。――はゝあ、將軍は部屋を暗くして、そつと泣いてござつたな。」さう思ふと、幕僚は、彼等の眼の前で將軍が涙を見せられたより一層悲壯な氣に打たれて、我しらず胸が迫つて來た。――是は公事を重んじ私事を輕んじた最上乘のお手本。苟も公職にある人は是非とも乃木將軍の意志をついで、第二の乃木將軍とならざるべからず。――

此の外、自修自行の典型は無業禪師の莫妄想、――瑞巖禪師の主人公。――世界は大學校、困苦は良師友。――見るとして修行の典型ならざるなし。聞くとして修養のお手本たらざるなし。――必ずしも鎭州の大蘿蔔頭に限らず。――鎭州の大蘿蔔頭について云へば只知る。如何なる仔細で大蘿蔔

が其の地の名物であるか、依つて來る根源は知らぬが、大蘿蔔はたしかに大蘿蔔と承知して居る。大蘿蔔を大蘿蔔と知ればそれでよろしい。――禪に於ては強ひて、鵠は何が故に白く烏は何として黑い、と根ほり葉ほり穿鑿するは、所謂混沌に眉目をつけると一般。寧ろそのものそれを殺すのである。白きは白きのまゝ白きに徹底、――黑きは黑きのまゝ黑きに徹底、――大蘿蔔は大蘿蔔のそのまゝ徹底。それが白の眞意義、黑の眞意義、大蘿蔔の眞意義である。――圜悟禪師の著語に、長者は自ら長、短者は自ら短、とある。諸君、擬議すること勿れ、爭辨鵠白烏黑と云ふ句を。』されど趙州禪師は賊中の大賊。

賊と云へば釋迦も達磨も賊、天も地も賊、山も川も賊、鴨居も敷居も賊、盡三千大千世界、一物として賊ならざるものなし。只知も賊だ。爭辨も賊。此の頌を作られた雪竇禪師は賊が賊を知ると云ふ魁賊である。』俚語に、問ふに落ちずして語るに落つる、と云ふことがあるが、趙州禪師の如きはそれである。自是擔枷過狀の金箔つき、證明持參の大泥棒は趙州禪師である。信ぜざれば看よ。問僧は元より、末世の今日總ての禪學者が、大蘿蔔頭の一句下に於て全財産の鼻孔を拈得されつゝ、(全財産とは身心に積重して居る百千無量の知解分別等を指す。)拈得されしことを知らずして鼻孔を動かして居る。無慚愧の至り。――

必ずしも趙州禪師の大蘿蔔頭に限らず、見聞覺知、一々のものに鼻孔を拈得されてをる。諸君、お互が拈得されしことを知らずに鼻孔を動かして居る。』更に家賊のあるあり、如何にして是を防がん。須く人々自知すべし。敢へて辨ずることを要せず。

（昭和十二年十一月六日講演）

第三十一則　麻谷持錫遶床

◎垂示

垂示云、動則影現、覺則氷生、』其或不レ動不レ覺、不レ免野狐窟裏、』透得徹、信得及、無絲毫障翳、如龍得水、似虎靠山、』放行也、瓦礫生レ光、把定也、眞金失レ色、』古人公案、未レ免周遮、』且道、評論什麼邊事、』試擧看、』

讀方

垂示に云く、動ずれば則ち影現れ、覺すれば則ち氷生ず。其れ或は動ぜず覺せざれば、野狐の窟裏を免れず。透得徹し、

信得及すれば、絲毫の障翳無く、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。放行するや、瓦礫も光を生じ、把定するや、眞金も色を失ふ。古人の公案も未だ周遮なることを免れず。且く道へ、什麽邊のことを評論するにや。試みに擧す看よ。』

「動則影現」形の外に影はない。影の外に形はない。形影元來只一。――水の外に波なし。波の外に水なし。水波從來不二。されど形のあるところ影現じ、水のあるところ波顯る。所謂、思内にあれば色外にあらはる。――水波共に、形影俱に、是れ眞、是れ實。――「覺則氷生」迷には迷の跡があり、悟には悟の痕がある。迷に迷の跡があるうちは眞の迷に非ず、――悟に悟の痕がある間は眞の悟に非ず。――眞の悟には悟の痕なし、――眞の迷には迷の跡なし。――迷悟共に痕跡なき所に到達すれば、所謂寤寐恒一で、迷即迷に非ず、悟即悟に非ず、迷悟を超越したる眞迷眞悟である。――然らざれば覺と云ふと雖も眞覺に非ず。覺の痕跡あるは蓋し止むを得ざるなり。――以上の二句は、明鏡當臺、妍醜自辨、と云ふ道理を表明したものと知るべし。』と井上君は云うて居られる。(麻谷の錫を持つて禪床を遶る底を暗に云うたものならん。)――「透得徹」「信得及」大悟徹底、それが透得徹、信得及である。動相も覺

念も、清風明月を拂ひ、明月清風を拂ふ、で、拂ひ拂ひ拂ひ盡くした、それも拂うた、その痕跡をも留めざる信心不二、不二信心底、其の大自在、其の大自由、蓋し比するに物なし。――「放行也」隨他意、所謂隨緣赴感。――先の出やうで鬼にも蛇にも、なつて見せます佛にも。』――されど此の菩提座を離れず。――「把定也」隨自意、所謂銀山鐵壁。――佛來も打し祖來も打し、善來も惡來も打し打し盡くす。されど信水あれば菩提の月現出せざるなし。――「未免周遮」俗に廻り遠いと云ふこと。婆々談義又は駄法螺、蓋しそれらの類。直入直截ならざる意である。衲の提講の如きが婆々談義、駄法螺の顯著なる實例である。――

左に婆々談義をつゞけませう。動則影現、覺則氷生、恁麼の二句は僧肇法師の言葉である、と故大内君は云うて居らる。如何にも肇法師のお言葉に相違あるまい。』――動と云ふも覺と云ふも心作用、――影と云ひ氷と云ふも心の變動。――敎相家は三細六麁と云ふ道具を並べて講釋を致しますが、衲は敎相家でなく禪僧家であります。故に極めて簡短に動則云々を說明致します。死人は無論別として、大々的馬鹿でない限りは、如何なる人でも寒いときは寒いと思ひ、暖いときは暖いと感ずる。又渴しては飲みたくなり、飢ゑては喫したくなる。それが當然

であり、それが自然である。從容自適、任運騰々、その中に一點の私念私意を加へざる所が、佛とも神とも眞如とも法性とも云ふのである。――要は、動ずべきに當りて動き、覺すべきに臨んで覺す。さすれば、如何に動じて影を現じ、如何に覺して氷を生ずるとも、一々法性そのまゝ、眞如そのまゝ、佛の働であり神の振舞である。恁麽の道理に暗く且つ道理を自得せざる人は、「外諸緣を息め、内心喘ぐことなく、心墻壁の如くにして以て道に入るべし。」と云ふ達磨大師の垂示を文字のまゝに解釋し、無理に、動く心を動かさず、覺する心を覺せず、おさへ〳〵するは、道理に順應する者に非ずして、野狐窟に墮在する者で

ある。――（狐と云ふ動物は頗る疑深い動物、例せば氷を渡る時には一歩往いて之を叩いて見、又一歩往いて之を叩いて見て、其の音の確でない時は、必ず氷上を渡り過ぐることを止めて戻つて仕舞ふ、と云ふ。故に疑惑の多くして未だ禪境に達せざる者を野狐禪者流と云ふ。）「野狐窟」と云ふは不自由底を意味したもの。乞ふ諸君、文字に迷ふ野狐となる勿れ。』大燈國師も三十年間野狐窟に坐在したと自白して御座る。古往今來、野狐窟裏に死坐せざる人、蓋し一人もあることなし。苟も野狐窟を脱出せんと欲せば、須く透得徹し、信得及すべし。如何が透得徹し、如何が信得及すべし。云く、動不動、覺不覺、の煙幕裡に

彷徨せず、萬里片雲なき朗々たる天外に出頭すべし。――その萬里片雲なき所とは、前に云ふ、動ずべきに當りて動き、覺すべきに臨んで覺す、而して覺せし痕を止めず、動きし跡を殘さず、それ、それである。そこには絲毫も障翳あることなし。故に如何に動ずるも如何に覺するも、覺するそのまゝが龍の水を得るが如く、動ずるそのまゝが虎の山に靠るに似て、眞箇透得徹し信得及したる人の一擧手一投足、その活動の無碍縱横底は、一種格別であり一種不可思議である。――其の不可思議作麽生。曰く、放行するや瓦礫も光を生じ、把定するや眞金も色を失す、で、殺すも活かすも、小を大にするも大を小にするも、醜を美にするも美を醜にするも、毘盧遮那如來の頂上を土足で踏むも、草木國土をして悉皆成佛なさしむるも、それこそ朝飯前のお茶の子さい〳〵である。――如是、透得徹し信得及したる處から一瞥すれば、「古人の公案未だ周遮を免れず。」一超如來地と云ふも直截根源と云ふも、如何にも廻り遠い、如何にもクドイ〳〵。且道、什麽邊の事を評論する。本則の公案そのものにつき、何人が野狐窟に居るか、何人が絲毫の障翳なき處に居るか、放行は何人か、把定は誰人か、一々點檢し一々考究し、果して周遮たりや否やを明々白々にし來るべし。――云ふ勿れ、不免周遮と。――

不免周遮と云ふにつき、序に萬松老人從容錄中に、麻谷振錫の話の示衆、一讀三嘆すべき無文字の好文句があるを左に拈出して、諸君の睡魔を拂はん。曰く、

指鹿爲馬、握土成金、舌上起風雷、眉間藏血刃、坐觀成敗、立驗死生、且道、是何三昧、』

一々文字上の周遮たる說明は省略。佛祖正傳の王三昧より觀見すれば、(透得徹、信得及、)乾坤を鼻毛の先で突飛ばすことも耳糞を丸めて丈六の黃金佛とすることも別に造作はいらぬ。況んや鹿を指して馬となし、土を握つて金と成す位のことは尋常の茶飯事。故に舌上に風雷を起し、眉間に血刃を藏す、敢へて難事に非ず、蓋し平生底である。かゝる人こそ、孔明以外の孔明、耆婆以上の耆婆、坐して千里外の成敗を觀、見ずして幾多の死生を知る。可謂、三昧王三昧と。其の力の大なること靈法界に曾て比なし。――　章敬、南泉、兩禪師の如きは透得徹し信得及せし人ならん。麻谷の如きも敢へておくれたるに非ず。馬の進まざりし也。お互も馬の進まざるを如何せんである。

◎本則

擧、麻谷持錫到章敬、遶禪床三匝、振錫一下、卓然而立、敬云、是是、(雪竇著語云、錯、)麻谷又到南泉、遶禪床三匝、

振錫一下、卓然而立、泉云、不是不是、(雪竇著語云、錯)麻谷(當時)云、章敬道是、和尚爲什麼道不是、泉云、章敬即是是、汝不是、此是、風力所轉、終成敗壞、』

讀方

擧す。麻谷、錫を持つて章敬に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振ること一下し、卓然として立つ。敬云く、是是。(雪竇著語して云く、錯。)麻谷又南泉に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振ること一下し、卓然として立つ。泉云く、不是不是。(雪竇著語して云く、錯。)麻谷(當時)云く、章敬は是と道ひしに、和尚は什麼としてか不是と道ふぞ。泉云く、章敬は即ち是是なるも、汝は不是、此れは是れ風力の所轉にして終に敗壞と成らん。』

麻谷寶徹禪師は蒲州麻谷山に住す。法系は

馬祖道一
- 百丈懷海
- 麻谷寶徹
- 章敬懷暉
- 百丈惟政
- 南泉普願

知るべし、麻谷、章敬、南泉、は同じく馬祖門下にして法の上の兄弟。――麻谷禪師は極めて覇氣のある人であると云ふ。臨濟錄に出てをる。詳細の傳はわからぬ。――「錫」錫杖のこ

と。印度の僧徒が旅行するときに必ず携帶する道具の一つ。其の作りかたは、鐵または銅を以て、或は六環或は十二環、それを二股又は四股ある枝にかけ、之を振れば錫々然と音がする、それを杖の先に附けたもの。道を歩く時に之を鳴らしつゝ行けば、路頭に居る蟲などが遁れ避けて踏み殺される難をのがれる。行乞の時は錫杖の音を聞きて人々が貪欲の眠を覺して施物の用意をする。其の錫杖が支那に傳はり、又日本にも傳來、今日此の錫杖を持して旅行する修行者を稀に見ることがある。禪家の拄杖と兄弟の間柄で、佛敎者には非常に愛玩される物品。——「禪床」坐禪の椅子、禪師の坐して居る處、所謂一座具の地。

——「卓然而立」俗に云ふヌーッと高く立つたこと。云ひ換へれば上は三十三天上、下は金輪水際奈良久のどん底まで、錫杖と自己と不二一體となつて直立不動、——是れ凡か、是れ聖か、佛か魔か、將亦錫杖か麻谷か。——「錯」此の一字は雪竇禪師の錫杖。錯は出來そこなひ。何人が出來そこなひだ。章敬を指してあるが、まだ外にもあるぞ。人のことゝ思ふ勿れ。若し人のことゝ思うたら大なる失策、それこそ眞箇の錯。——「當時」此の二字、あつてもなくても本文の意味には別條なし。このまゝ措くも取捨つるも、見る人、讀む人におまかせする。——「章敬即是々、汝不是」章敬は即ち是、是れ汝は不是、と古今訓

讀して居る。井上君は、章敬は是々、汝は不是、と訓讀される。右の二樣の中、衲は井上君に共鳴して提講致します。――「風力所轉」經文の出所を拜借して說明すれば頗る明白になりますが、それは經學者に一任して、簡短に云へば、風に吹き廻さるゝ木の葉の樣なやつだ、人の尻馬について居ては何事でも成功はせぬ。獨立獨行、自尊自恭、それが禪だ。それが法だ。それが道だ。――「終成敗壞」卓然而立、是なることは是。相似禪、野狐禪。章敬、南泉を訪問する底。總て風力の所轉ならざるなし。俗に云ふ鉛禪。眞金は火に入ると色轉〻鮮。鉛は火に入ると忽ち敗壞。昔も今も鉛禪の流行には佛祖も草葉の蔭で末世を長嘆息して御座るであらう。佛祖のみではない。世間一般の人が笑ひ且つ悲しんで居る。禪學者猛省せざるべからず。

昔善財童子が南方五十三の善知識を訪問して此の一大事を研究なされた。其の古知を敢へて學んだわけでもあるまいが、或日、麻谷の寶徹禪師が法兄の章敬懷暉禪師を勘驗しようと思うて、錫杖を持つて、章敬禪師の坐禪入定して居らるゝ禪床を遶ること三匝、(右遶禪床三匝は支那印度に於て叢林問法する時の式、隨喜渴仰の信意を表す。)錫杖をガシヤ〳〵と鳴らして、卓然としてつゝ立つた。――是が垂示にある動影、覺氷。所謂、魚行けば水濁り鳥飛べば毛落つ、で、既に麻谷禪師の我慢無禮の

姿が顯現した。一枚見識を擔ひ來つて章敬禪師を試みんとする、賊意は識者を待たずして分明である。――圜悟禪師が此の處へ下語して、「曹溪の樣子一模に脫出す。」と云うて居られるが、實に然りである。昔、曹溪山の六祖慧能大師の處へ、永嘉の眞覺大師(未だ大師とならざるとき)が始めて往かれた。今の麻谷禪師と同じやうに禪床を遶ること三匝、振錫一下して立たれた。其の時、六祖大師、「汝は何の處より來つて大我慢を生ずるや。」と叱責せられたことがある。』其の樣子そのまゝ生き寫しであるぞ。似たることは似たり、是なることは是ならず。六祖は六祖、永嘉は永嘉、麻谷は麻谷、章敬は章敬、北斗は七

つ、南星は八つ。章敬禪師は麻谷の心肝五臟を透得徹し信得及して云く、是是。――放行に似て把定、把定の如くにして放行。――仁者は是を仁と云ひ、知者は是を知と云ふ。麻谷禪師が是是に醉倒されたは聊か大人の襟度なきものと云ふべし。雪竇禪師橫槍を入れて錯と云ふ。――之是の錯、麻谷が錯か、章敬が錯か、將亦雪竇自身の錯か。「此の錯には擒あり縱あり、擡あり搦あり。」と飯田師は示して居られます。敢へて此の錯には限りません。一擧手一投足、擒あり縱あり、擡あり搦あり、でなければならぬ。麻谷禪師は、章敬禪師の是是は我が意旨に共鳴したもの、と自ら許し、更に錫を轉じて南泉禪師の處に到

り、前と同じく禪床を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。南泉禪師も章敬禪師の如く是是と許すであらう、と自分自身で堅く信得及して居たにもかゝはらず、泉云く、不是。――此の一句把定、徹底的麻谷の一枚見識を奪ひ盡くした。此の時、麻谷禪師は如何なる顏色をなせし。俗に云ふ青菜に鹽、――雅に云へば眞金色を失す。是を、龍頭蛇尾とも、始めは脫兎の如く終りは處女に似たり、とも云ふ。麻谷禪師も流石の男を下げた。――此處へ雪竇禪師が錯と一棒を入れた。眼南泉を見て意必ずしも南泉にあらず。(或人は云ふ、雪竇禪師の兩錯、前の錯は章敬の是是に向つて錯と云ひ、此の錯は南泉の

不是に對して錯と云ひし、」と。果して然るや否やは親しく雪竇禪師に參じて知るべし。) 雪竇禪師の心底畢竟那邊にありや。――人々研究すべし。他人の口頭に左右せらるゝ勿れ。南泉禪師の不是に落膽して、聊か手に入れたお悟を失却し、人我の見を起して云く、章敬禪師は是是と道ふ、和尙什麽としてか不是と道ふ、と面色を變じて詰問に及んだ。圜悟禪師、此の處へ下語して、「主人公什麽の處にか在る。」と注意をされたは如何にも親切である。麻谷禪師は參問の根源を失却し理窟の枝葉に血迷うて居る。南泉禪師、法兄弟の親情より引導を渡して曰く、章敬は即ち是是、汝は不是。可謂、寸鐵殺人と。南泉禪師、舌頭骨

なし。是を無言の言、無說の說と云ふ。是と云ふも是の是とすべきなし。不是と云ふも不是の不是となすべきなし。要は其の機の如何にある。聞く、佛鑑禪師、章と泉とを評して曰く、「昨日出都門、忽逢二商旅一、一指我南行、一指我北去、南行有船過渡、北去有車馬大路、雖然南北不同途、都在中華一國土。」と。以て是、不是、の參考に供すべし。南泉禪師更に老婆して云く、此是の風力所轉、終成敗壞、と。(これは汝は不是の註釋。)圓覺經に、「我今此身四大和合、所謂、髮毛爪齒、皮肉筋骨、髓腦垢色、皆歸於地、唾涕膿血、皆歸於水、暖氣歸火、動轉歸風、四大分離、今者妄身、當在何所。」と云うてある。南泉禪師の處に來つて、麻谷禪師、非常の威風を示し、錫杖を振つて禪床を三匝し、卓然として直立したとは云ふものゝ、それは禪の力でも定の力でもない。畢竟は風大の力に過ぎず、云はゞ自動でなく他動だ。故に風力の所轉も四大分散の曉には敗壞して仕舞ふぞ。火に入つて燒けず水に入つて溺れず、と云ふ金剛不壞、それでなければ此の南泉は許さぬ、と銀山鐵壁にかまへられた。南泉禪師の慈悲顏は見るも恐ろしいぞ。されど宇宙に敗壞せざるものありや。劫火洞然大千共壞、――大隋禪師云く、隨他去。――果して他に隨ひ去らば麻谷禪師と道伴。(意旨を誤認する勿れ。)――如何せば可ならん。云く、坐禪々々。坐禪の

外に道なし。坐禪すれば恁麽の消息が分明になる。衲、敢へて人を迷はさんや。

◎頌

此錯、彼錯、切忌拈却、四海浪平、百川潮落、古策風高十二門、門門有路空蕭索、非蕭索、作者好求無病藥。』

讀方

此も錯、彼も錯。切に拈却することを忌む。四海浪平らかに、百川潮落つ。古策風高し十二門、門門路有り空蕭索。蕭索に非ず、作者好し無病の藥を求むるに。』

「拈却」却は放棄の意に非ず、玆では出の意で、拈出である。

拈了也、是も處に依りて拈出也となる。蓋しそれと同一轍と心得て然るべし、』と聞く。――「四海浪平、百川潮落」天高うして鳥の飛ぶに任せ、海濶うして魚の跳るに任す。又は、千溪萬岳蒼海に歸し、四夷八蠻帝都に朝す。這箇には、是だの不是だの、地獄だの極樂だの、迷だの悟だの、と云ふ風波は絶對にない。來る日も來る日も天下泰平、國土安穩。――「古策」古人のやり方、と井上君は註して居らる。通常の人は錫杖に使用して居る。』意旨は十二門にあり。――「風高十二門」錫杖に環が十二ある故に十二門と云ふ、と俗解する人と、十二門は十二部經だと云ふ人と二人、四海浪平、百川潮落、その中で一場の

喧嘩に花を咲かせて居る。雪竇禪師が聞いたら、錯、錯、と雙方共に錯の一字で、元の四海浪平、百川潮落、になさるでありませう。十二の環が即十二部經、十二部經が即十二の環ともなれば、十二支ともなり又十二ケ月ともなる。一念萬念、萬念一念。――「門々有路」大道無門、無門是れ眞箇の門。千差有路、有路即無路、無路即大道。』無路の大道を踏み眞箇の門を透過する底の人は誰ぞ。――「空蕭索」寂莫の意に解するお人と、廻り遠い意に解するお人と、兩般になつて居る。』廻り遠いから透過する人が少い、少いから寂莫だ、と云へば云へぬこともない。雪竇禪師の意は果して那邊にありや、宿題しておきます。――「非蕭

索」寂莫ではないぞ。廻り遠くはないぞ。活潑々に翻轉し來る。――是もある、不是もある。迷も悟も地獄も極樂もある、ある、ある。四海浪起り、百川風動く。千機萬機一時に轉ず。――「無病藥」此の藥は無病の病をなほす藥。悟病の大妙藥。――德山禪師の棒も臨濟禪師の喝も、俱胝の一指も、無病の病毒を拔く神丹である。章敬の是、南泉の不是、雪竇の錯も無病の藥だ。――頌頭の此錯彼錯。此錯は章敬の是是それか。彼錯は南泉の不是それか。然らざれば麻谷の三匝卓然と立つ底それか。麻谷に非ず南泉に非ず章敬に非ず雪竇底か。然り然らず、此錯、彼錯。錯のときは徹底錯。右も錯、左も錯、

上も下も、今時も那邊も錯、錯。佛界も魔界も錯、錯、更に錯。
――錯とは如何なるものぞ。老婆して白隱禪師は是を隻手として其の色を見して其の聲を聞かせ、趙州禪師は是を無字として其の色を見せた。――無を見るとき無の外になにものがある。隻手を聞くとき隻手の外になにものがある。盡十方法界一箇の隻手。
――盡三千大千世界一箇の無字。――錯のときは一箇の錯あるのみ。之是の間、切忌拈却。――是だの不是だの、執るだの捨つるだの、押すだの引くだの、と云ふ閑葛藤がどこにある。知るべし、向上の那一路、聲前の那一句は、四海浪平、――轉處實に能く幽にして僞も無く亦眞も無し、百川潮落、――

清流間斷なし、月白く風涼し。日々是れ好日、時々是れ好時。
――されど下化衆生の爲には、路なきに路を設け、臨機應變の手段、應病與藥の方便なかるべからず。麻谷禪師の錫を振うて卓然として立つ底、可謂、古策風高十二門、と。四海浪動き、百川風吹く。風は吹くべし、浪は動くべし。――知者は水を愛し、仁者は山を樂しむ。鷄寒うして樹に上り、鴨寒うして水に入る。――章敬は是是、南泉は不是、雪竇は錯。分に隨ひ力に應じ、左せんと欲する者は左せよ。右せんと欲する者は右せよ。門々有路、往來御隨意。――曾て釋迦如來、錫を振うて卓然として立つ。古策風高十二門、門々有路。去るものは追

はず、來るものは拒まず。有門より入るも好し、空門より入るも可なり。亦有亦空門より來るも、非有非空門より來るも、敢へて不都合はない。――されど如何せん空蕭索を。――法堂前草深一丈、――鏡川圖山鳥飛不渡。――門、設けたりと雖も常に閉せりでなく、常に開放すると雖も人來らず、此の道今人捨てゝ土の如し。――イヤ仔細に點檢し來れば、非蕭索。十方薄迦梵、一路涅槃門、人々脚下、箇々足の向く處、淸風匝地、眞如の花は開き菩提の實は結ぶ。――即心是道場、步々是如來地。――麻谷の遶禪床三匝も、章敬の是是も、南泉の不是も、雪竇の兩錯も、百合一片、一片百合、――總て是れ無病の藥。――苟も禪を研究しつゝある人、新たに禪を修せんとなさる人、又は無事禪に默坐して動かざる漢、若しくは野狐禪に醉倒して覺せざる輩に向ひ、雪竇禪師勸告して曰く、「作者好求無病藥。」と。正眼に大觀し來れば眞箇無病の人は三千大千世界に一人もあることなし。何れも無病の病に苦しみつゝありながら、其の無病の病を覺知せざるのみ。――麻谷禪師が卓然として錫と共に立つ、それが無病の大病である。其の病根を拔く無病の藥は、章敬禪師の是是、南泉禪師の不是、それである。章敬禪師と南泉禪師の無病の大病を本復さする無病の藥は雪竇禪師の錯、錯、之是の兩錯である。――果して然

らば雪竇禪師の無病の大病は誰人が手を下す。圜悟禪師聽脈して曰く、「一死更に再活せず。」と。――雪竇禪師の錯と、圜悟禪師の一死更に再活せずと、共に是れ無病の良藥。――諸君、恁麽の無病藥を拜服して禪病と共に總ての無病の大病を徹底的に平癒なされ。衲も拜服して身心共に輕快の破凡夫とならん。

天童禪師、本則を頌じて曰く、「是與不是、好看捲禮、（ワナのこと。）似抑似揚、難兄難弟、』縱也彼既臨時、奪也我何特地、』金錫一振太孤標、繩牀三遶閑遊戲、』叢林擾々是非生、想像髑髏前見鬼。」是と不是は本則の全提。是と不是とのワナに陷つたら喪身失命。――南泉の不是は抑へた樣であり、章敬の是是は揚げた樣である。兩人共に同穴の狸。是も必ずしも是ならず、不是も必ずしも不是ならず。學者、文字言句に迷ふまいぞ。章敬と南泉は同じく馬祖門下の活衲僧。何れが兄とも何れが弟とも、兄弟の甲乙は下せぬ。其の手段を見よ。南泉が不是と奪うた其の間に妄想分別はない。章敬が是是と與へた其の間、豈是非得失あらんや。章敬、南泉の活動ぶり、元より仰瞻すべし。特に賞讃すべきは、金錫一振太孤標、の麻谷の武者振である。或人は云ふ、富岳が巍然として白雲の間に獨露したるが如き趣がある、』と。――實に孤標。――法戰一場する以

前に於て禪床を三遶する其の從容底は、所謂、英雄の胸中、忙裏に閑日月あり、と云ふべきで尋常の人の及ぶ處に非ず、敬々服々、と麻谷禪師に花をもたせた處は、流石に天童禪師、敬々服々。蓋し尋常一樣の善知識の腕とは御腕が格別である。更に一轉して會下の龍象に對し警句を吐却される、叢林擾々是非生。無眼子共が、南泉がどうの、章敬がどうの、麻谷がどうの、とめくら滅法に的外れの矢を放つて、獨斷的にわれこそは〳〵と騷ぐのは、實以てお氣の毒千萬、悲嘆の極だ。想像髑髏前見鬼、で自分と自分で眼を撫して空華を見るが如く疑心暗鬼、——枯れ木株を幽靈と思ひ、岩角を鬼神と考へ、自己の足音を送り犬と認め、眼を廻したり氣絶したりすると何ぞ異ならん。——愚中の愚、——拙中の拙、——自己の脚痕下に着目せずして、物を追廻して居つたら、百年行脚修行しても聊かも得る處はないぞ、と大喝一聲。——諸君、居眠が覺めましたか。——

以上天童禪師と雪竇禪師の頌。天童禪師の句を拜借して兩禪師を評すれば、難兄難弟、縱也彼既臨時、奪也我何特地。——雪竇禪師の句を以て兩禪師を品すれば、門々有路空蕭索、——非蕭索。——徒に擾々として是非を生ずる勿れ。悉く是れ無病の藥。——錯、諸君の點檢に一任す。

（昭和十二年十一月二十日講演）

第三十二則　定上座佇立

◎垂示

垂示云、十方坐斷、千眼頓開、一句截流、萬機寢削、還有同死同生底麼、見成公案、打疊不下、古人葛藤、試擧看、』

讀方

垂示に云く、十方を坐斷して、千眼を頓に開き、一句を截流して、萬機を寢削す。還同死同生底有りや。見成公案、打疊不下ならば、古人の葛藤、試みに擧す看よ。』

「十方坐斷」禪者の活動、――所謂、水を踏むこと地の如く、

地を踏むこと水の如し。林に入つて草を動ぜず、水に入つて波を揚げず。別に不思議はない。――「千眼頓開」禪者の活眼、――所謂、眼、東南を見、意、西北にあり。南に面して北斗を見る。尋常底。――「一句截流」一句と云うて必ずしも文字言句に囚はれてはならぬ。百千萬言も時に一句とすることもある。エヘン、ウフン。が、百千萬卷の經文となることもある。要は截流すべき對機にあり。截流は截斷衆流の省略である。禪家の茶飯底なり。――「萬機寢削」總ての運作動作を中止する意味。寢は息なり、ヤムと讀み、削はケヅル、ケヅリ取ル、と云ふ意。――先方の活動を我が掌中に把住する底。唯自の境

界。所謂、觸處生涯隨分足、何嫌伎倆不如人。――「見成公案」「打疊不下」見は現、疊は成、下は可。――現成公案、打成不可、となすべし。其の意は、當面の問題を悟得することが出來ぬ、と云ふこと。或は諸君も衲も此の仲間かも知れぬ。

此の垂示は定上座問臨濟の本則を拈出する前提であります。故に圜悟禪師、臨濟禪師の意中を洞觀し、尋常ならざる十方坐斷、――一句截流底を發揮せられたのである。敢へて禪宗の僧侶に限りません。――苟も禪宗坊主であるならば、なほのこと、丈夫自ら衝天の氣あり如來の行處に向つて行かず、と云ふ見識を備へ、壁立萬仞の態度を以て十方を坐斷すべし。(十方は

東西南北、四維上下である。強ひて方角を守る勿れ。要は佛界も魔界も、迷境も悟境も、世間も出世間も、何もかも一切をお尻の下に引敷いて、ウンともスンともいはさぬ、それ、それでありります。)千眼を頓に開くべし。(お經には五眼と云ふがある。天眼、肉眼、慧眼、法眼、佛眼。然るに茲には千眼とある。觀音菩薩は千手千眼を備へてをられると云ふが、決して觀音菩薩のことではない。人々が白隱禪師の所謂一隻の靈眼、心眼を豁開し來れば、このまゝの肉眼で三千大千世界を照破することが出來る。全身これ眼となり、全身これ手となり、全身これ口となり、而して能く物に對し機に應ずれば、事として辨ぜずと云ふ

ことなく、業として成らずと云ふことなし。一句截流、萬機寢削、豈夫れ難からんや。十方坐斷の力あり千眼頓に開けば、一舉手一投足の動作を借らず、立地に相對的知識、差別的造作、等々のあらゆる機略を寢削し盡くすことは、湯を以て氷を消するよりなほ易し。以上の活作活用を具せし人は、無論、臨濟禪師その人である。還有同死同生底麽、外に何人かある。(圜悟禪師も雪竇禪師も臨濟禪師も同死同生底。)仁に當つては師に讓らず、此の事は古德先賢に遠慮はいらぬ。我と思ふ人は速に出頭し來れ。――とは云ふものゝ、後學初機、見色聞聲に於て坐斷し寢削すること能はざる漢あらば、古人の落草談たる葛藤、それに依り一隻眼を開くも、蓋し修行の一階段である。要は月を見て指を忘るゝにあり。

◎本則

舉、定上座、問臨濟、如何是佛法大意、濟、下禪床、擒住與一掌便托開、定佇立、傍僧云、定上座何不禮拜、定、方禮拜、忽然大悟、』

讀方

舉す。定上座、臨濟に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」濟、禪床を下つて、擒住して、一掌を與へて即ち托開す。定、佇立す。傍僧云く、「定上座、何ぞ禮拜せざる。」定、禮拜する

に方つて、忽然として大悟せり。』

「定上座」此の人の傳記は不明。故に親の名も生年月も一向に知れません。臨濟禪師の語錄に出てをりますのが此の本則である。』或人は云ふ、定上座は臨濟門下の一隻箭で、能く臨濟の機鋒を受け、臨濟の再來とまで云はれ、臨濟の活機を受用し、一生涯、大寺名藍に出世せず、雲水生活で終られた、と。——此の定上座に有名の逸話があります。一日途に、巖頭、雪峰、欽山の三人に逢ふ。(巖頭と雪峰は後に德山禪師の法を嗣ぎ、欽山は洞山良介禪師の法を嗣ぐ。)此の三人を當時、江湖で雪巖欽の三行と稱し、何れも歴々の修行者である。相携へて臨濟禪師

を訪問しようとして來た處、幸に臨濟禪師の高弟定上座に途中で逢うた。三人は之を好機とし、巖頭先づ問うて云く、「何れの處より來るや。」定云く、「臨濟より來る。」頭云く、「和尚萬福なりや。」臨濟禪師御機嫌善いか。定云く、「已に順世し了れり。」和尚は遷化されました。頭、「某等三人、特に來つて和尚を禮拜し敎を請はんとしたが、福緣淺薄にして示寂に遇ふ。嗟、——殘念だ。御遷化になりましたか。折角此處まで來たから、上座にお尋ねするが、和尚日頃何と言つて垂示されました。願はくは一兩則を擧示せよ。」と定上座に請ひました。定上座、三人の求道熱心に感じ、路傍の小高い所へ登つて、全く自身が臨濟和

尙となり濟まして云く、「赤肉團上一無位の眞人あり。常に汝諸人の面門より出入す。未だ證據せざる者は看よ看よ。時に僧あり。出でゝ問ふ、如何なるか是れ無位の眞人。濟便ち禪床を下り擒住して云く、道へ道へ。僧擬議す。濟便ち托開して云く、『無位眞人是れ什麼の乾屎橛ぞ、』と。便ち方丈に歸る。」諸君も知らるゝ如く、此の無位の眞人の一則は臨濟錄中の難透であります。定上座、此の一則を擧揚された。是を聞いて流石に巖頭、――覺えず舌を吐きし。然るに年少の欽山は、「何ぞ非無位の眞人と云はざる。」と著語した。定上座は許さない。定上座、イキナリ欽山の胸グラを擒住して云く、「無位の眞人と非無位の眞人と相去ること多少ぞ。」サア云へ、サア云へ、と押しこくつた。――欽山答ふる能はず、顏色眞靑、眼を白黑して人心地なきに至れり。定上座は臨濟の嶮峻な機鋒そのまゝであるからたまらない。――是の法戰一場を見て、法兄の巖頭が出て詫を入れて云く、此の者は修行未熟、上座に對してトンダ失禮、望むらくは慈悲、且く放過せよ。此の度丈は許してやつて下さい、と賴んだので、漸く定上座も、巖頭、雪峰の二人に對して許したが、「若し這の兩箇の老漢なかりせば、這の尿床の鬼子を打殺してやつたものを。」と罵倒した。――實に定上座の機鋒近傍すべからず、であります。――「臨濟」鎭州臨濟の慧照禪師とは、黃

檗希運禪師に佛法的々の大意を問ひ、六十棒を頂戴し、希運禪師の機鋒そのまゝ以心傳心し、五家七宗の中に於て特別の家風を發揮された人である。』特別の家風とは、云く、雲門天子、臨濟將軍。――臨濟禪師は即ち大將が三軍を率ゐて戰場に馳向ひ馬上にて號令指揮して居る慨がある、と。――其の家風そのまゝの機鋒嶮峻底が本則である。――「佛法大意」大意は大略の意味でなく、極意、至極の眞意である、と解する人がある。佛法は由來、百合一片、一片百合で、大略も至極も無い。問ふも佛法の大意、答ふるも佛法の大意。總てが悉く佛法の大意である。看よ、佛法の大意ならざる處がどこにある。――

「擒住」ひッつかまへる、是れ佛法の大意。――「托開」おしのけること、是れ亦佛法の大意。――「佇立」キヨロンと立つて居ること、是れも佛法の大意。――「傍僧」そばに居合せた僧。侍者か、或は訪問の客僧か、――何れにしても、臨濟禪師、否、禪家の呼吸を飲込んで居る人ならん。然らざれば、何ぞ禮拜せざる、などゝ、間に髮を容れざる注意は出來ぬ。是れ亦復佛法の大意。――

更に重ねて婆言を弄しませう。玆に生き活きした禪家の活商量がある。定上座と云ふ江湖歷參底の一僧が、黃檗希運の衣鉢を傳へ將軍の如き機鋒嶮峻の一家風を宣揚して御座る臨濟禪

師の處へ、「如何是佛法大意。」と質問の矢を放つた。此の僧、臨濟禪師の手元を知つて問うたとすれば、如何にも自由のきかぬ奴。若し臨濟禪師の家風を知らずに問うたとすれば、命知らずだ。――知る知らぬは暫く不問に附し、『佛法の大意とは抑〻如何なることか、定上座、未到底。――佛法の大意中に居て佛法の大意を問ふ。可謂、白雲堆裏不見白雲。』――鏡は金殿の燭を分つ、で、「濟下禪床擒住、與一掌便托開。」臨濟禪師、問僧の問聲未だ全く絶えざるに禪床を飛下り、僧のムナグラを鷲づかみにひツつかまへて、頰面をビシヤリとたゝいておいて、ウント力まかせに突出された。茲に佛法の大意が漲つて

居る。さればと云うて、禪は打つが藝ではない。叩くが本領ではない。所謂、斷ずべきときに當つて斷ぜざれば却つて其の禍を招く。其の機を見るべし。其の時を知るべし。流石に臨濟禪師、問僧の其の機の熟せしを洞察し觀見し、痛處に一針を下された。――そのお手元、實に斬新々々。』――名劍客が拔く手を見せず切斬せしに、切斬せられた其の人は、知らずして一二町往き、石につまづき斃れて始めて切斬されしことが知れた、と云ふが、定上座は臨濟禪師に一刀々下に切斬され、其の切斬されしを知らずして佇立せり。――此の佇立こそ十方坐斷の根源にして千眼頓開の基礎。之是の基礎、――之是根源なか

りせば、欽山に對して、「若し這の兩箇の老漢なかりせば、這の尿床の鬼子を打殺してやつたものを。」と云ふ嶮峻なる機鋒は決して揮ひ得らるゝものではない。』嶮峻なる機鋒は、臨濟禪師の擒住、一掌、托開の賜である。――何事でも九死一生と云ふ處まで押しつめなければ復活はしない。窮せよ窮せよ。窮すれば通ず。特に禪に於ては是非とも大死一番せざる可からず。大死再生でなければ、如何に七縱八横の活用あり如何に四音八辯の活句ありと雖も、總て是れ天魔外道の妄想邪行である。――定上座の佇立は九死の當體、大死のそれである。可喜、可尊、可愛。――傍僧云く、「定上座何不二禮拜一。」と。圜悟の下語に、

「冷地裏有二人覷破一。」と。俗に傍觀八目と云ふことである。局に當る御本人よりは、局外に居る者が却つて氣がつく。上座々々、老大師に對して禮拜なさい。東家の人死すれば西家の人助く、で、修行者同士の義理であり人情である。――「上座何不二禮拜一。」と云ふ之是の一言、釋迦に對する明星、靈雲に對する桃花、無門に對する皷聲、白隱に對する鐘音。――若し傍僧の「上座何不二禮拜一。」の一言なかりせば、或は定上座一生涯、之是等の人でありしならん。――此の點より云へば、傍僧は臨濟禪師以上の大恩師である。――傍僧に注意せられて茫然自失の定上座、ア、さうだ、と氣がつき禮拜する。此の時はやく、

彼の時おそく、間に髪を容れず、禮拜するや大悟、大悟するや禮拜、禮拜と大悟、大悟と禮拜。――一に非ず二に非ず、一にして二、二にして一、只是れ自知すべし。指示すべからず。

――試みに諸君に問ふ、定上座は臨濟禪師の活作略に依つて悟りしか、傍僧の親切に依つて悟りしか。――無論、臨濟禪師の活作略、傍僧の親切、それ、それが大々的の援助である。

――されど定上座に平生眞參實究の功績なかりせば、臨濟禪師の活作略も傍僧の親切も、徒勞にして所謂草臥儲けに了りぬ。――要は人々眞參實究にあり。眞參實究しつゝあれば、敢へて外來底の援助なくとも、大悟徹底、豈夫れ疑あらんや。

必ず大悟徹底が出來る。――更に諸君に問ふ、「定上座忽然大悟」とあるが、此の何ものを大悟せしや。元來佛法多事なし、定上座は佛法の大意を問うて果して佛法の大意を大悟せしか。誤つて定盤の星を認めてはをらぬか。向上の一路、聲前の一句から云へば、既に佛法なし。況んや大意に於てをや。全然なし。決してあることなし。なしと云ふも亦なし。――本來無一物、何處惹塵埃。』――若し大悟があれば大疑がある。大疑に對する大悟は、大悟と云ふと雖も實は小悟。現今、幾多の定上座あり。自ら稱して大悟々々と連聲する。畢竟、極小の微覺である。微覺は一の妄想、妄想は生死流轉の元。大悟、豈生死流轉の元

ならんや。――――果して然らば大悟は大悟せざれば大悟の大悟たる所以を大悟する能はず。如何にして大悟すべきや。人は云ふ、眞參實究すべし、と。衲は云ふ、禮拜せよ、と。――――云ふ勿れ、曇華は錯を以て錯に就く、と。――――

◎頌

斷際全機繼後蹤、　持來何必在從容、　巨靈擡手無多子、　分破華山千萬重、』

讀　方

斷際の全機、後蹤を繼ぐ。持し來つて何ぞ必ずしも從容在らん。巨靈手を擡ぐるに多子無し。分破す華山の千萬重。』

「斷際」是は裴相國が奏上により大中天子より賜はりし黃檗の禪師號である。大中天子、曾て一時香嚴下に沙彌たりし。智閑と遊方して廬山に到る。智閑、瀑布に題して曰く、穿雲透石不辭勞、地遠方知出處高、と。起承の二句を再三再四朗吟して居らるゝと、大中、溪澗豈能留得住、終歸大海作波濤、と轉結の二句を添へられたので、智閑、大中天子の尋常底の人に非ざることを知得された。――――後鹽官禪師の下で書記たりし。其の時、黃檗は首座。禮拜瘤のある黃檗は例によつて禮拜して居られた。大中天子、三度問うて三度打たれた。(委細の事は十一則に出てをります。)大中天子、愈〻帝位を繼ぐに當つて、麁行の

沙門と號を賜はられた。それを裴相國の盡力で斷際と改められたのであります。故に斷際は黃檗禪師のこと。――「全機繼後蹤」黃檗禪師の機鋒嶮峻、其の專賣特許權を臨濟禪師が悉皆讓り受けた。故に臨濟禪師の手元は黃檗禪師そのまゝ、そつくり麁行である。否、斷際で、いつも〳〵截斷衆流の活腕である。――「在從容」是は抑下。貴族然としてをらぬ。雲門禪師や趙州禪師の如き泰然自若を聊か缺いてをる。俗に云ふ二口目には直きに鐵拳を揮りまはす筋肉家だ、と雪竇禪師は云はるゝが、禪の修行は臨濟禪師流がよい。特に近來は一層其の感を直接に悟得しました。老婆禪は蓋し人を愚劣にする殺人禪だ。

――禪は活人でなければ禪の禪たる價値はない。――誤つて亂暴に落在する勿れ。――「巨靈」河の神。大神通を具して御座る。日本の神話に、近江の土で一夜に富士山を造つたとある、それと同一轍で、支那の神話である。必ずしも神話とするに決定してはをらぬ。人々が巨靈人であるぞ。――「擡手無多子」茶に逢うては茶を飲み、飯に逢うては飯を喫す。別に造作もなければ面倒もない。任運底、恁麽の境界を徹底的に手に入れなければ禪家者流とは云はれぬ。諸君のお手元は如何に。――「分破華山千萬重」聞く、華山、元は只一のみ、それが分れて大華山、小華山の二つになりしと。何人が二つになせし。

巨靈神である。巨靈神が神通力を以て、邪魔をして居る千萬重の山を分破して、黄河の水を東流させた。其の古事を拈出し來つて、臨濟禪師その人に比したは雪竇禪師の大神通である。お互も神通を具して居る。試みに華山の千萬重を分破し來れ。

――長談義で咽喉が乾いた。お茶一服頂戴。――序にもう少々諸君のお耳を拜借致しませう。

嚴師、好弟子を出す。臨濟禪師は黄檗禪師の嗣法者。師に過ぎて始めて傳授するに堪へたり。臨濟禪師の機鋒嶮峻は黄檗禪師の機鋒嶮峻より更に機鋒嶮峻である。井上君は云ふ、「斷際和尚の腕力商賣、臨濟和尚が一手で買占め、彼方でビツシヤリ、

此方でビツシヤリ、朝から晩までビツシヤリ、ビツシヤリ。」と。云ひ得て妙、思ひ得て當れり。――雪竇禪師云く、「持來何必在從容」。」惡辣と云へば惡辣。活潑々の禪機、轉轆々の活作略。敢へて惡辣に非ず。慈悲心より流露する爲人度生の靈光にして大法擧揚の遊戯三昧底である。――黄檗禪師然り。臨濟禪師然り。其の流れに浴する衲等亦復然らざるを得ず。誰かある。衲が禪機の一棒、一喝を受けて見よ。聞いて見よ。――

伊東彌五郎一刀齋が越前敦賀の在に老を養つて居ります處へ、神子上典膳が遙々訪ねて内弟子になりました。素より怜悧な典膳、僅かに三年の間に劍道は勿論のこと、合氣の術迄悉く

傳授され、最早名人の域に到達しました。――――處へ諸國修行から戻つて參りましたのは、兄弟子の小野善鬼。善「師匠、久々にて御機嫌宜しう。――――五年振りで只今立戻りました。」一「オ、よく戻られた。其の方も無事で目出度い。――――時に修行振りはどうであつた。」善「いづれへ參つても滅多に敵手は御座いませぬ。殆ど勝續けで中國から九州の端まで參りました。」一「それはよかつた。――――就いては善鬼、其の方の留守中、神子上典膳と申す者が入門いたした。」――――善「ハツ左樣で御座りまするか。」一「疲れを休めたら彼と一試合をして見い。勝ち方に一刀流の極意皆傳を得させるであらう。」善「ハ、ア左樣

な勝れた人に御座いますか。如何にも相手をして遣はすで御座いませう。」と、善鬼は鼻の先で笑うてゐました。その話の中に外より戻つて參りましたのが神子上典膳、師匠一刀齋の紹介で初對面の挨拶をする。やがて旅の疲れを息めた小野善鬼は、善「先生、それでは御言葉通り神子上氏と一試合を致しませうか。」一「ア、よし〳〵。――――コレ典膳、善鬼と一勝負して見よ。豫て申したる通り、勝つたる者に一刀流の極意を授けることにいたすぞ。」典「ハツ――――小野氏、宜しく御願ひ申します。」そこで互に木刀を把つて身構へる。双方青眼に取つて動かない。兩雄互格の腕前か、寸分の隙もないと見え、エーツ、

ヤツの氣合ばかりをかけて、いつまでも睨み合つて居る。審判役の一刀齋は、相手の眼の配り、體のコナシ、氣合等に細かに氣を配つて居る。さうかうする内に、小野は氣合が次第に亂れて、遂に神子上の爲に氣合負けの氣味。一「兩人休め。――どちらも能く學んだ。」兩「ハイ恐入ります。」一「今日はこれだけとして又明日再び試合を致せ。」其の翌日も亦兩人は死力を盡して試合つたが、勝負がつきません。最後に小野は神子上のために氣合負けをして了つた。これを見て取つた師匠の一刀齋、一「善鬼よ、約束通り神子上に一刀流皆傳の一巻を取らせるから、惡う思ふな。此の上は其の方の彼れに及ばぬ處の氣合を工夫いたし、十分に心を練つて神子上から極意を受けるがよい。」と。――

神秀禪師と慧能禪師と五祖弘忍禪師の下で法戰一場の大商量、と似たりや似たり、さも似たり、實に難兄難弟である。神子上は一刀齋の皆傳を得、慧能禪師は弘忍禪師の骨髓を得、臨濟禪師は黃檗禪師の心血を傳ふ。蛙の子は親蛙の鳴聲をなし、獅子の子は親獅子の鳴聲をなす。臨濟禪師が親黃檗禪師の機鋒嶮峻を振廻すは自然の結論である。――故に衲は「何必在從容」をそのまゝ敬愛する。――雪竇禪師も衲と同感であらう。其の確證は轉結二句に、「巨靈擡手無多子、分破華山千萬重。」と、臨濟禪師の接化の面目、度生の本領を、そのま

、頌出された其の舌鋒筆力には、如何なる天魔外道も倒退三千である。――臨濟禪師、定中に於て或は滿足であらうか、或は不服であらうか。――滿足であらうと思ふは雪竇禪師のうぬぼれ、――不服であらうと思ふは曇華の忖度。――滿足、不服は暫く置き、』多子を用ひずして千萬重を分破する底、其の例又少からず。倶胝の如きは一指、趙州の如きは喫茶、無業の如きは莫妄想。其の他解打皷、失を見よ。句を見よ。或は面壁、打地、三球。何れも分別思慮に渡らず、任運にして大法を擧揚し、群生を化度せらるゝ其の瀟洒絶、絶瀟洒、――見るべくして取るべからず。仰ぐべくして及ぶべからず。――

――臨濟禪師の如きは所謂禪者の男性。故に隨機說法、應病與藥の上に、多少の圭角ある如くに感ずるは、その人それ自身の圭角にして臨濟禪師の圭角に非ず、と知るべし。――禪師の心底、禪師の行底は、春の如く溫和にして慈悲徹底である。されど如何せん一見秋霜烈日の如くに見ゆるは蓋し臨濟禪師の一家風にして、暴に似たる手段は一種の活方便。――之是の一家風、中に千佛萬祖の未だ曾てなさゞる一種の風味あり風光あり、風彩あり。――本則の如きが其の一例。諸君、臨濟禪師、爲人の妙處がお手に入りましたか。――飯田君、臨濟禪師が定上座をして忽然大悟せしめた其の樣子を評して曰く、「疑情の

千萬重を打破し、妄水を融解して禪河の流れを疏通せしめたは、禹門三級の浪に導かれて黄河となり、遂に大海に歸するが如きだ。」と。――飯田君が多言を費やさずして臨濟禪師の家風の千萬重を分破なされしは日本國昭和の巨靈神である。――

終りに臨んで、試みに諸君に問ふ、即今巨靈神何れの處にかある。――云ふ勿れ、巨靈神は古代の神、と。――分破せよ分破せよ。――分破せざれば巨靈神は見えぬ。巨靈神は出現せぬ。先決問題は分破だ分破だ。分破は禪の本領、禪の面目。分破を外にして禪はない。佛法はない。眞理はない。大道はなし。――分破は人をして安樂を得せしむるの母なり。分破は人をして活潑たらしむる妙藥。――分破の母に依り分破の妙藥を喫せば、如何なる愚劣漢も一朝にして佛となり祖となり、而して福德圓滿、無量長壽の人となる。――分破とは畢竟如何。曰く、大死一番是なり。白隱禪師云く、「若い衆や死ぬがいやなら今死にやれ、一度死んだらもう死なぬぞや。」と。實に然り。何人も死はいやだ。死がいやなら分破しなさい。「死はいやだ、いやだ。」と云ひつゝ分破せざる人は、思ふに實際の處は死に度いのであらう。不自由し度いのであらう。地獄へ落ち度いのであらう。それもよからう。――妄想せよ妄想せよ。迷へ迷へ。迷の至極、妄想の最後、自然と目が覺める。それも分破の一つ

だ。更に婆言を添ゆ。孝行をし度い時には親はなし。――修行し度き時には師はなし。――即今分破せざれば他日後悔するのみ。後悔の時に當つて曇華を恨むこと勿れ。――

（昭和十二年十二月十一日講演）

387
67

昭和十三年十一月九日印刷
昭和十三年十一月十五日發行

發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終